古瀬戸の文様

中川千咲

日本陶磁の意匠では仁清の優雅、柿右衛門の婉麗、鍋島の精美、古九谷の豪放、あるいは織部の斬新さが賞せられているが、古瀬戸の文様は素朴ながら剛健で、中には意外に創意に富むものもあり、また好ましいものである。

古瀬戸の意匠が大陸窯藝に倣つていることは周知の通りであるにしても、受容の在り方、その間に見る獨創性、あるいは性格などに注目すべきことが多いと思われるので、從來そうした方面に餘り手がつけられていないままに、その一端を探つてみることとした。

一

古瀬戸の文様は、瀬戸では平安時代より須惠器窯系の窯を築き、初期灰釉瓷の燒かれたこともあつたが、鎌倉時代に高火度釉の燒成を行うとともに印花、劃花、貼花などの手法によつて表出されるようになつたのである。

この新しい窯技は傳えるように加藤四郎左衛門景正が中國の製陶法を移入したのにはじまるのかどうかは問題を殘しているが、大陸との關係は、鎌倉・博多・堺・唐津など當時海港であつたといわれる地や、福岡觀世音寺附近、廣島草戸庄、新潟出湯、青森十三港などの遺蹟から夥しい數の中國龍泉窯などの青磁片をはじめ景德鎮の青白磁、その他白磁、黑釉磁、高麗青磁の陶片が發見され、當時大陸からの輸入陶磁は莫大な量であつたと思われるし、古瀬戸の作にはそれらの諸窯と形、文様の近似するものが多く、從來から熟知されているように、彼の濃い影響をうけていることは明らかに認められるのである。

今文様を見るに先立つて、器形及び文様表出の技法は深い關係があるので極く概略だけ觸れておこう。

古瀬戸には四耳壺、瓶、瓶子、水注、佛花器、香爐、などあるが、四耳壺には、肩のやや張つたものと、それに比してやや撫で肩で胴長なものがある。前者は多い形で、似たものは末期の須惠器、初期灰釉瓷にも求められないこともないが、耳の付方はもつと簡單

で、しかも穴が横になるように付いている。中國には古く似たものがあり、その類が平安時代には舶載され倣つたのではないかとも見られているが、南宋の產とされる千葉館山出土、福岡太宰府觀世音寺出土の青白磁四耳壺などと更に近似するようではあり、また當時多く輸入されていた類でもあるので、先づそうしたものの影響とみたい。後者は少ないが、越後三島郡岩塚村白山神社境内經塚出土の南宋と推定される白磁四耳壺など近い形が求められる(赤塚幹也　世界陶磁全集2、菊文四耳壺解說・滿岡忠成　出湯經澤出土の陶器、茶わん一二一に多くよつた)。從つて今のところ瀨戸の四耳壺の形式はわが國須惠器の流と關連はあるにしても、先づ中國の影響によつて形造されたものと思われる。

瓶には腰の細くなつて長目のものと、腰のすぼまりも少なく、太目のものとあつて、口には多くヒダがあるが古くわが國には見ない文壺姿ではあり巴

挿圖　1　菊印花文四耳壺（高 28.5 糎）

挿圖　2　談山神社及び東京國立博物館の茨城縣岡村出土の南宋景德鎭の青白磁瓶などにその原形が求められ、當時舶載されていた類として、彼に倣つたのは明かである。

瓶子には裾の擴まつたものと、比較的擴まらないのがあり、宋、高麗にも似たものがあるが、前者では裾の擴がりが、彼より更に開いたものがあつて、手向山神社藏の桐竹蒔繪瓶子のような平安時代の瓶子などに通ずるのを思わせる。そして、このような形は大體陶技では無理が多く、裾をせまくするのが製作上自然的な在方とすると、あえて困難な仕事をしている點からしても漆藝などの瓶子にならつたと思われるのである(久志卓眞　日本陶磁と其源流　茶わん一二二參照)。

その他、廣口壺、水注、百合尊など大陸の器形をそのまま寫した

ものがなかなか多い。

文様裝飾の手法には印花、劃花、貼花がある。印花は新羅土器などに見られるが、古瀬戸の場合は高麗の象嵌青磁の法を倣ったともいわれている（滿岡忠成、日本人と陶器）。古瀬戸には高麗の文様を寫したものもあり、象嵌青磁に見る印花、劃花併用と同じような法を行っているものもあるし、高麗青磁は當時輸入されていたし、これらの點からやはり高麗象嵌青磁の手法に倣ったものであろうと思われる。

劃花はわが國では平安時代といわれる壺に見事な秋草蟲の文様が見られるのをはじめ、近年發掘され、わが國上代陶磁史上重要な意義を有する猿投窯、その他にもあり、鎌倉以前既に行われていたことは明であるが、古瀬戸では文様の種類、表現法からいって前代のものと關連するとは思われず、大陸のものを倣ったといえよう。

挿圖 3　巴文瓶（高24.0糎）

貼花は少なく、貼付するという手法はわが國の土器類にあっても、一つの文様としての役割をしている程のものでなく、中國では唐三彩に見事なのがあるし、宋にも龍泉の青磁に牡丹、魚などを浮文としたのがあり、それらは多く舶載されていたし、また裝飾法から見ても、中國のものがきっかけとなって行われたと思われる。

二

古瀬戸の文様は古瀬戸といわれる作品が多いだけに種類も可成あるが、ここでは一應、よく知られている壺、瓶のうちで、文様が違

挿圖 4　牡丹唐草文廣口壺　東京國立博物館藏（高25.7糎）

い比較的顯著なもの若干を摘出して見ていきたいと思う。

菊印花文四耳壺（挿圖1）　形は前述の如く中國のものに倣い、釉はかせている。一つの菊花のまわりに六つの菊花をめぐらして花文とした文様が印花で耳の間にほどこしてある。菊花は高麗象嵌青磁には多いし、菊花を集めて花文のように裝飾したものもあるし、印花の法は前述の如く高麗象嵌青磁に倣つたとすると、この文様もまた彼に發するとも考えられる。しかし、高麗青磁の菊花はほとんどが、一つの花が細い三角形をなし、中心の二重圓は割合大きいのに、これは中心圓は小さく、一つの花も先が丸くなつており、また全體に彼より整つているのである。わが國では菊花文様は平安時代より鎌倉時代に用いられ、鎌倉には和鏡、漆器、武具の金具などに盛んに見られ、螺鈿などにはこの壺の菊花に通ずるものもある。從つていま手法や、花文風の裝飾法は彼に倣つたとし、また菊花を裝飾するということも當時の盛行の故か、高麗のものに發するか定めにくいとしても、一つの菊花の表現は日本風と見たいのである。この壺が窯技から見て古瀬戸の早い頃のものと考えられるものだけに、そうしたことはなかなか興味をおぼえるのである。

（右）挿圖　5　金銅舍利塔部分　奈良西大寺藏
（左）挿圖　6　牡丹文様錦部分　東京國立博物館藏

挿圖　7　青磁浮牡丹文蓋物（徑 24.5 糎）

巴文壺（挿圖2）　透明性朽葉色の釉を厚くかけ、内面には黒飴色の釉をほどこし、胴の上下に太い捩土をめぐらし、竪に同じような太い捩土を貼付け、その筋の間に巴文をつけた重厚で迫力ある古瀬戸の代表作である。この胴に竪に堆線をほどこした法は新羅末の灰釉瓷に堆線を附し印花文をあしらつたものがあるが、器形から見ても宋磁の堆線文のある壺に倣つたと見られよう。

巴文はわが國では古くから屋瓦などに用いられ、その起源などの問題については大正のはじめの「考古學雜誌」や、終り頃の「歴史と地理」などの誌上で盛に論が闘わされたのであるが、それはともかくとして、平安末から鎌倉にかけて盛んに使われたようで、例えば信貴山縁起、隆能源氏物語、伴大納言繪詞、男衾三郎繪詞、吉備大臣入唐繪詞、石山寺縁起、一遍聖人繪詞などに描かれた衣服の鎌倉時代に普通見る巴文は頭が丸るく大きく、長い尾のある形のものが三つ集つているのであるが、これは三つが密着したやや異つたものである。同形のものが朝鮮の建築裝飾にもあると聞くが、宋磁にも高麗磁にもなく、鎌倉末か室町初と見られる和鏡に同様のものがあるし、密着しているのは印花として刻線にて表わすための手段とも解せられるし、鎌倉時代の巴文の盛行を思うと、やはりその中類に見られるし、また和鏡、建築裝飾にも用いられているのである。中國では古銅器に、高麗では建築裝飾などにあるが、陶磁には見られず、この壺の巴文も、先ず鎌倉時代の巴文の流行によつて飾られたものと考えられる。

巴印花文瓶（挿圖3）　姿は太目であるがよく整い、黄綠釉のかかつた瓶で、全體に大きな巴の印花文が施してある。

挿圖 8　唐草文瓶（高25.0糎）

に生れたと考えられるのである。

牡丹唐草文廣口壺（挿圖4）　型押の牡丹唐草を施し、内外全面に黑飴釉をかけ古瀬戸のうちでも優れた作で、鎌倉末の百目窯の産と見られている。鎌倉市稲村崎で發見された嘉暦の年號ある墓に骨壺として納めてあつたという。

牡丹唐草は平安時代には三十六人集伊勢集などに見られるような

挿圖 9　梅花文瓶　東京國立博物館藏（高26.8糎）

寶相華唐草風のもの、あるいは平家納經陀羅尼品表紙のような幾分寫生的要素を帶びたものがあつた。鎌倉時代には西大寺舍利塔（挿圖5）などの佛具や和鏡をはじめ、博物館藏の直垂の錦（挿圖6）などかなり用いられたが、前代の様式をうけた類で、文様的で端麗でありこの壺の牡丹とは趣の異つたものである。中國では定窯や、磁州窯系のものに寶相華風の牡丹は盛んに用いられたが、龍泉の青磁にはこの壺の牡丹のような寫生風に近いものが多くある（挿圖7）。それは壺のものほど奔放で、また花瓣も細長くないが、花の扱い、蕊や、各花瓣の先が特に擴がつた形に通ずるところがあるようであり、當時龍泉磁の輸入の多かつたのを思うと、それに發するものと見たいのである。古瀬戸にはこの様式の牡丹を裝飾したものはなかなか多い。

挿圖　10　蓮唐草文四耳壺　東京國立博物館藏（高44.0糎）

唐草文瓶（挿圖8）　この瓶は黄綠釉をかけ、頸根に花瓣文、胴に唐草文、裾に劍頭文を繞らしているが唐草文は牡丹とも菊花とも見られる。これを牡丹としても一つの花瓣で大きく包むようなところに宋磁のものの面影を見るがやや違うし、高麗象嵌青磁のものとも異るし、また、前述の鎌倉時代の他の牡丹とも同じとはいえぬもので、強いていえば宋磁のものを日本化したとも見られるのである。裾の劍頭文はわが國では平安時代以來鎌倉にかけ、神社建築の裝飾として、また繪卷物を見ると船、あるいは太鼓の裝飾に用いられており、そのはじめは別として、當時は日本の文様であつたといえる。この瓶の劍頭文の裝飾法は宋磁の瓶などの裾に蓮瓣の類を施しているのに倣つたものであろうが、文様は蓮瓣をわが國の劍頭文に代えたものと考えたい。なお劍頭文はその用いられている例から、守護とか、降魔とかあるいは尚武のごとき何か意味があると思われ、古瀬戸の場合も同じような意味が含まれ

奈良　長福寺　藏　金銅能作生塔部分

挿圖　11

ているのでないかとも考えられるが調べが及ばなかつた。

梅花文瓶（挿圖9）　黄褐色釉が厚くかかつた瓶で、梅花を扱つたところ日本的であり、裾に劍頭文に類する文様が施されていて前者の文様と同様の性格になるものと思われる。

蓮唐草文四耳壺（挿圖10）　胴の下方を刻線で劃し、その中に唐草をあしらい、上方には一面に蓮華唐草を飾り、裾に立波文をめぐらし黄緑釉をかけた重厚な作である。蓮唐草は平安時代の三十六人集赤人集、平家納經信解品表紙などに見るが、各瓣は割合小さく數多く、纖麗に仕立ててある。鎌倉中期の優れた工藝品である西大寺金銅舍利塔、長福寺金銅能作生塔などの蓮唐草（挿圖11）も雄麗になつてはいるが、様式はそれらに近い。これと較べると、宋代の定窯、汝窯、磁州系窯に盛んに見られる蓮は、多くが花の形が開き切つたというように横に擴がり、各花瓣も大きく、奔放な形のもので、青白磁などにもまた同じ様式のもの（挿圖12）が扱われているのである。

挿圖 12　青白磁瓶 東京國立博物館藏（高39.0糎）

壺の蓮はこれから宋磁系のものとも趣を異にしており、むしろ鎌倉期の金工などに見る蓮唐草と通ずるところがあり（挿圖13）、また古瀬戸の香爐には金工品と同じ形のものがあるなどと合せみて中國のものに倣つたとしても、可成日本化されたと見られるものである。

雙魚文鉢（挿圖14）　見込に雙魚文を線刻した平鉢で、外側には大まかに牡丹文が刻してある。雙魚文は宋磁にしばしば用いられているし、龍泉の青磁にも浮彫したのがあり（挿圖15）、また高麗の鉢にも見られる。それに倣つたことは明らかであるが、今いづれを採つたかは定めにくい。たゞ高麗の鉢に裝飾法や魚、波の表現、手法にこれと非常に近いものがある（挿圖16）。

挿圖 13　西大寺金銅舍利塔屋蓋

魚藻文瓶（圖版Ⅰ參照）　文様がなかなか面白く、古瀬戸の中でも珍らしく好ましい作である。澤瀉や波はモチーフに表現に日本的なものといえるし、魚は前の鉢と相通ずるところも窺われるが、その素朴な表現は、波などと不思議にマッチし、諸要素を含んだ獨特

な趣を示したものとして注目される。

柳文瓶（挿圖17）　この柳文は高麗象嵌青磁のいわゆる蒲柳水禽文の柳と表現が近いので、それに倣つたと見られているものである。

菊唐草文瓶（挿圖18）　頸根に花瓣文、肩の上、下に珠繋文、その内と胴に菊唐草、裾に篦彫の蓮瓣文がある。珠繋文は器の繼目に施すなどの技術的な面とも關連があるのであろうが、朝鮮新羅土器にしばしば見るところであり、高麗象嵌青磁の殊に合子などには盛んに用いられ且つこれと同じように菊唐草とともに用いられている場合が多い。

菊花の表現は日本的であるが、花と葉を印花で表わし、線彫でこれをつないでおり、この印花、劃花併用の手法は高麗象嵌青磁に學んだと思われるものであるし、裝飾法全體にも高麗磁に通ずるところがあるので、それに關係ある文様と考えたい。

花文瓶（挿圖19）　形のよくととのつた器で、珠繋、蓮瓣、波形、

挿圖 14　雙魚文鉢（徑30.0糎）

挿圖 15　青磁雙魚文盤

挿圖 16　高麗青磁雙魚文鉢

劍頭など種々の印花文で裝飾し、淡黄色軸がかけてある。蓮瓣は、普通には器の裾、あるいは頸根に廻らしてあるが、これは胴の中央に施しているのが珍らしく、このようなものは強いて求めれば、新羅のものに胴に廻らしたのがあるが、關連は分からない。ともかく劍頭文のようなわが國の文様、朝鮮風と見られる波形や珠繋の使用によつて、見事にまとめあげたものといえよう。古瀨の印花文は二百種を越えるといわれ、それらを組合せて器物を裝つているものも多く、これもその一

つとして、瀬戸窯の創意を物語つていると見てよいと思われる。

なおこれらの他水注や、小壺、香爐などにこれら以上に斬新なもの、面白い文様のものがあるが、調査していないものも多いのでここでは割愛することにする。

以上述べたものの意匠を見るにいづれも形は宋磁に倣いながら、文様には中國南宋の龍泉を主とした青磁、景德鎮の青白磁、あるいは高麗象嵌青磁の文様を摸したもの、それらの文様を主として日本的文様を加えたもの、それらの文様を日本化したもの、日本的文様で飾つたものと大別出來るのである。

これらの製作期は、瀬戸窯に於ては鎌倉の中期の終り頃から、簡素な印花や櫛目文が現われ、末期になつて佛花器、香爐、大瓶などが造られるとともに印花、劃花、貼花の文様が盛行したのであつて、ほとんどが末期のものといえる。その中で窯技や文様からみて、菊花印花文四耳壺は早い頃の產と思われるし、蓮唐草の四耳壺は一つの頂點を示すものと考えられるが、更に各々の前後關係を明らかにするのは容易でないし、從つてこれらの文様についての展開の詳細をつかむのも困難である。

なお燒かれた窯は瀬戸に非常にたくさんある窯のうち、特に優れたものが燒かれたという百目窯、松留窯に推定されているものが多い。

百目は鎌倉後期古瀬戸最盛期の窯とされ、瓶子、四耳壺、香爐などを燒き、形、殊に釉調がよく、文様も緊密ですばらしいものが多いようである。しかし窯址は現在跡片も無くなつている。またこの窯の影響をうけた近くの三ッ、裏志天木、五葉、窯洞、林などでも比較的優れたものを燒いたといわれている。

挿圖 17　柳　文　瓶

挿圖 18　菊唐草文瓶 東京國立博物館藏（高23.9糎）

松留の窯は瀬戸林のほぼ中央で、現在は水源地として水底に沒しているという。そこから發見されたと稱する陶片、完器は器地、釉藥、形は百目に劣るが作風に變化があり、柳文様、雙魚文のものが出たといい、文様に珍らしいものが多いので、この點前者より優れた窯とされている（小山富士夫　古瀬戸の瓶子　國華六六二參照）。

この兩窯址とも現在は煙滅していて嚴密な調査は出來ないし、また

挿圖　19　花文瓶　東京國立博物館藏（高27.0糎）

これ以外にも優品の出る窯があるといわれ、これらのうちには直ちに百目あるいは松留窯の產とするにはなお研究を要するものがあるようである。

三

これらの文様をわが國陶磁の文様の上から見るに、土器や、奈良

右挿圖　20　經筒外容器　東京國立博物館藏（高28.6糎）
左挿圖　21　二彩鉢　醍醐寺藏（徑37糎）

三彩は別として、線刻の類によつて文様を表わしたものは平安時代から見られる。卽ち京都府愛宕郡花脊村別所の經塚から出土した經筒の外容器に唐草が（博物館藏）（挿圖20）、奈良縣南葛城郡吐田鄕增出土の綠釉水注には簡單な若草の散文が、三重縣多度町柚井出土の綠釉小瓶には劃花寶相華

文が、醍醐寺の綠釉に黃褐釉を配した二彩の盤には寶相華が大きく暢達に線彫されている（挿圖21）。また慶應大學所屬の川崎市南加瀨出土の常滑產と思われる秋草文壺には芒、瓜、柳、蜻蛉、規矩文などが線刻してある。

また最近發掘によつて有名になつた愛知縣の猿投山西南麓古窯址群の黑笹十四、九〇號窯址から出土した十世紀末から十二世紀初頭にかけての主に前半頃の產とされる小皿、碗、水注、香爐蓋などに線刻、あるいは透彫で色々な文様が表わされている（挿圖22）（楢崎彰一猿投山須惠器器の編年世界陶磁全集1）。

これらと古瀨戸の文様を比べるに、古瀨戸では前に述べたように大陸のものを中心としており、中に日本的なものがあつても、當時の工藝品などの文様と通ずるものであつて、前代の陶器の文様と關連あると思われるものは見當らないのである。

文様の性格からいつても、前代の陶器、殊に文様のあるものは金工品になぞらえているように、文様も毛彫、透彫の風を寫したと見られるもので、陶の特質を生かした、陶のための裝飾とはいいにくいものなのである。これに比して古瀨戸の文様は技の巧拙は別として、大陸のものを倣つただけに陶器のための文様、陶器としての裝飾となつているのであつて、共に陶に施された文様ではあるが、その性格を異にしていると解されるのである。

挿圖 22 （a）花文鉢破片 （b）透彫唐草文香爐蓋

また窯の上からも綠釉陶は窯址から、京都、大阪、滋賀、愛知春日井市、篠岡附近で製作され、平安末には影を潛めていて瀨戸との關連は求められず、常滑は平安時代末にはじまり、鎌倉には瀨戸をしのぐ量產を示したが、日常雜器のみであり、窯技から瀨戸との關係は認められていない。猿投窯は瀨戸に近く、灰釉陶窯を含む須惠器の大集團地帶で、九世紀後葉から十世紀に互つて、佛具や貴族、寺院などの生活用具を燒き、十世紀末から十二世紀初頭にかけて前述のような文様ある器を作つたが、後、技低下し壺、鉢、皿の日常器のみとなり、十二世紀中葉以後には山茶碗を中心とした粗製の日常器となつてしまつたのであつて、現在のところ瀨戸、殊に古瀨と關連があつたという形跡は認められていないのである（主として楢崎氏の御說によつた）。

卽ち瀨戸の窯業は須惠器窯系に發したので、古瀨戸にもそうした傳統も底に流ていたであろうし、灰釉系の釉彩も平安以來の釉技と關連があるとも思われるが、文様はいわば、わが國窯業の傳統や流を基盤とせず、大陸の影響のもとに、彼を寫すのみでなく、それを日本化し、あるいは當時の日本の文様を採り、また優れた創意も示し、その中によく時代の風潮をも盛つたものを作り上げている點が注目され、しかもそれがいわば陶磁としての文様をはじめて具現したと見られる點にまた大きな意義が存すると思うのである。

更に當時の地の工藝と比べるに、鎌倉彫は中國の堆朱など彫漆器を眞似て創められた點古瀨戸と似ているともいえるが、これは古瀨戸のような文様の變化、創意といつたものは見られず、また大きな發展もしなかつたのである。

蒔繪、金工の類は時代の好尙をよく反映して華やかなうちにも强い表現を示したが、いづれも前代の傳統的表現の上に立つて改進されたものであつたし、和鏡の如きは後期に宋の擬漢式鏡を倣つたこともあつたが、内區は日本風の圖様とし、外區に齒文、柳齒文をめぐらし僅かに影響を見せるにとどまつているのであつて、いづれも積極的な攝取、變化などは生れなかつたのである。

このように他の工藝では傳統を基盤とし、またそれを離れようとせず、その中に時代の風潮を盛つたものであつたのに對し、古瀨戸は前述のように傳統の基盤にたたず、大陸のものを中心として變化に富んだ文様を作り、しかも時代の好尙を遺憾なく發揮しているのであつて、そこにまた瀨戸窯の當時の新興工藝としてのたくましい意慾がうかがわれるし、廣くわが國工藝史上に於ても注目すべき意義と價値を有するのである。

終りに本稿を草するに當つて調査の便宜を與えられた所藏家、御示教を賜わつた小山富士夫、田中作太郎、赤塚幹也、楢崎彰一氏に感謝する次第である。

附記　本篇は三十三年度文部省科學研究費による研究課題「日本美術に於ける宋、元、明の影響」の一部をなすものである。